

異色のシステムが勢揃いした自作マニアの祭典

# European Triode Festival 2004

2004年12月2~5日 ドイツ・ランゲナーゲン

レポート：内田 満

昨年、ドイツのランゲナーゲン(Langenargen)で開催された「ヨーロッパ・トライオード・フェスティバル 2004」に参加することができた。会は、真空管アンプやスピーカークラブトに関心のある自作派仲間(専門家も含む)による作品発表、アイデアや経験・知識といった情報交換の場であり、毎年開催されて今回で5回目を迎える。

スイス、オーストリア、ドイツの国境に位置するボーデン湖(ボデン湖)の2/3ほどの大きさのほとり、会場のリゾート施設「Familienferiendorf」へは、チューリヒから電車を乗り継いでいく鉄道の旅を選んだ。ところが、運行のタイミングが悪かったため、最寄り駅のホームへ降り立つ頃にはあたりはすっか



会場のFamilienferiendorf、ボーデン湖畔。静かな別荘地の一角にあるファミリー向けのリゾート施設



イベントの中心となった事務所棟。中には食堂、喫茶室だけでなく大小いくつもの部屋があり、今回のような規模の催しには十分な広さがある



初日のセッティング風景。このように両サイドをそのままエンクロージャーに仕立て上げてしまった部屋もある。これだけ大掛かりな作業を軽くこなしつつ、まるで違和感なく収めているところがすごい!



会場にほど近いボーデン湖の冬景色。ドイツ南端にあり、別名コンスタンツ湖とも呼ばれる

り暗くなり、ついには小雨まで降ってきてしまった。焦る気持ちを押え、タクシーに乗り込み会場へと急ぐ。

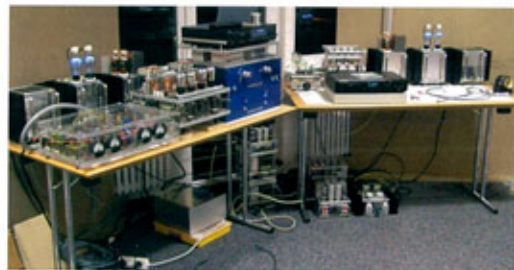
ようやく到着したものの、コテージの散在する敷地内は広く、灯りもまばらで、にわかに肌寒さを感じて心配になってきてしまった。恐る恐る歩を進め、しばらくすると事務所らしき建物にたどり着き、安堵と不安の入り交じるなかガラス戸を押しあけ中へと進んだ。すると、隣の部屋ではいくつかのテーブルを回んで大勢で何やら盛り上がりしている様子が見えるではないか。どうやら参加者を集めた夕食のようである。「チャオ!?!」「ボンジュール!?!」いや「グーテンターク!?!」...どう挨拶すればよいものかと立ち尽くしていると、イベントのオーガナイザー、Christian Rintelen氏がていねいな英語を交え温かく出迎えてくれた。このイベントにおける公用語は英語だったのである。

本イベントは実は一般公開していない。参加者のほとんどはインターネット上のフォーラムでお互いを知る関係で、年齢的には30~50代といった具合である。国ではドイツ、フランス、イタリアなどのヨーロッパ諸国だけでなく、なんとアメリカからやってくる常連もいるらしい。そういう意味では年に一度の世界規模のオフ会といえるかもしれない。

開催期間は4日間だが、初日と最終日は搬入・搬出、セッティング準備などにあてるため、実質2日



レクチャーが主体となった2日目のタイムスケジュール。ご質問の通り、朝食から夜のライブ演奏までびっしりと埋まっている



テーブルの上では収まりきらず、一部を床置きするほど大掛かりな真空管アンプシステム。パワーアンプ、ラインアンプなど、ここまで製作するのにどのくらいかかったか聞いたところ、お金も時間も費やしたが説明すらできない状態だという。いやいや自作もここまでと空恐ろしい...



左はフォノイコライザーだが、シャシーの構造がおもしろい。前後のパネル間を10本の鉄支柱(?)で支え、中央に電源基板。その左右に各チャンネル増幅器を配置した構造。右はKT88と思われるパワーアンプの内部。シャシー内に出カトランスを収容している



メッシュプレートの中製ナス型300Bを使用したシングルステレオパワーアンプ。トランス類はいずれもケース入りだが、見慣れない色と形でブランド名の記載がどこにもない。これも手製のケースでは?



一見して、ピックアップのメカ部を除きすべて自作とわかるCDプレーヤー。送り出しに真空管バッファを装備しているようだが、これだけの回路をよくシャシー内に収めたものだと感心する



こちらヨーロッパでも定評のサン・オーディオ製SV2A3(2A3)シングルステレオアンプは、左右に置かれた参加者の自作スピーカーシステムの出出しに使用されていた



大柄なPCケースほどのアルミシャシーによくここまでびっしりパーツを詰め込んだ211(845?)パワーアンプ。中央に鎮座する巨大な円筒の正体は50μF/2000VDC(1)。やはり高電圧のオイルコンデンサであった



右側には真空管を多用したD/Aコンバーターとわかったが、左もどうやらD/Aコンバーター試作品のよう。残念ながら製作者がそばにおらず。詳細を突き止めるまでは至らなかった



## イベント情報



重厚感たっぷりのアナログプレーヤー。部材からの削り出し加工によるターンテーブルとアームベースが目玉を引いた。入道石のベースを使い、木製トーンアームも装着されており、そのすべてに並々ならぬ情熱が注ぎ込まれていると想像がつく



壁にかけられたこのスピーカー。単なる平面パワフル型かと思いきや、後ろはスワイル構造のバックロードホーンになっている。ちなみに、ユニットはフォステクス製で、左上がホーンの開口部



日本製TADのドライバーから先はすべてお手製となる大輪の円形ホーンを使った2ウェイシステム。ホーンこればかりに目がいてしまうが、よく見るとその支持は、硬式テニスボールの角を介したインシュレーター構造になっている！



一目でコンデンサー型スピーカーとわかるが、これだけではやめられないのが自作派というもの、写真ではわかりづらいが、下部はウーファーを仕込んだエングロージャーと合体する独特の2ウェイ構造



思わず「目玉のおやじスピーカー」と命名したくなる、球状の樹脂エングロージャーのフルレンジ(上)や、下のバックロード型トールボーイのように、ユニット外周に合成樹脂製の皿(音を両面粘着テープで固定した個性化システムもある

的で小回りのきく運営を行う節操ぶりである。これは、オーガナイザーの手腕と情熱によるところが大きいだろう。

今回は個人的な都合により、2日間だけの参加となるため、残念ながらそのすべてを味わうことはできなかったが、足早に準備風景やレクチャー、作品群を観てまわるうち、ちょっとしたハブニングに出くわした。それは本誌の愛読者(既代表の方?)に、製作記事をはじめ内容がすばらしいので、ぜひとも英語翻訳版が欲しいと思願されてしまったのである(どうやら本誌の編集者と勘違している模様…)、それにしても本誌の人気は絶大だ。この人が特別な

エングロージャーに収まっているユニットはむしろ一と想って近付いてみると、やはり予感の如く、一度見たら忘れないうエッジレスの独特な作り、それはまさしくグッドマンのAXIOM80であった。テーブル左端はソニーのベルトドライブプレーヤーのようだ



テーマのプッシュプル回路に関する説明は、いろいろな回路を取り上げて順次プロジェクトで映し出す方法で行われた。これはそのうちの1つ、WEの回路



プッシュプル回路に関するレクチャーを行い、ゲストとして参加されたアメリカ[VACUUM TUBE VALLEY]誌のLynn Olson氏(右)とその補佐を務めたJohn Atwood氏(左)



通路脇のテーブルはご覧のとおりフリーマーケット状態。アンプやスピーカーユニットはともかく、中には巨大なオープンデッキや測定器までも平然と並べられている



白箱入りからソヴテックやウエスティングハウスなどの元箱入りまで、大量のMT管が並ぶ。値札を見ると左の入れ物には一本5ユーロ、右は1ユーロとある(1ユーロは135円)



真空管やコンデンサーといったパーツ類が数多く並ぶ一角で使えそうな掘り出し物を探そう。イタリアBartolucci製の角型ケース入りトランス(左上)を発見した！

のではなく、他の参加者の自作アンプやスピーカーの写真を見てもわかると思うが、クラフトにかける情熱はこちら日本と共通しているのだ。言語の違いこそあれ、趣味を同じくする者同士に出現などないのだと実感した瞬間でもあった。

最後にこの場を借りて、お世話になった方々へ感謝の言葉を申し上げたい。ゲストとして参加され、レクチャーも行ったジャン平賀氏(本イベントは氏を通じて知った)、例外といえる短期間で参加を快諾・歓迎してくれたChristian Rintelen氏、また会場を後にする際、駅まで送ってくれたもう一人のオーガナイザー-Wolfgang Braun氏、そして参加者の皆さんへ“Thank you for all!”



前日に引き続き今回もフェスティバルのオーガナイザーを務めるChristian Rintelen氏、自身は英国スイスの参加である



こちらは専門家の参加者。左よりフランス「REVUE DU SON」誌のジャン平賀氏、ドイツJAC-MusicのJac van de Walle氏、日本から和光電子の大和國裕氏とサン・オーディオの内田昌徳氏

● European Triode Festivalの公式Webサイト  
<http://triodefestival.net>